

日本海洋科学振興財団

海外渡航費用援助 報告書

2023年5月3日

氏名： Rodrigo Mundo

発表課題名： $^{234}\text{Th}/^{238}\text{U}$ 、 ^{228}Ra & ^{129}I to study the ocean-currents driven transport of dissolved polycyclic aromatic hydrocarbons (PAHs) at the southern Okhotsk Sea

所属機関(院生は大学院と研究科名)： 金沢大学大学院 自然科学研究科

職名(学生は学年：) 博士課程後期2年

渡航期間： 2023年4月21日-2023年4月30日

渡航先： ウィーン (オーストリア)

渡航目的とその成果、感想

毎年ウィーンで開催される European Geosciences Union (EGU) 総会に参加して、博士課程中で集中してきたデータを幅広い分野から評価を受けることを目的とした。自分のポスター発表ではオホーツク海南部における海水中汚染有機物（多環芳香族類）の環境動態を明らかにするために化学トレーサを含んだ総括的な議論をした。トレーサとして人工放射性核種であるヨウ素 129 についてもデータ・議論が含まれていた為 ETH Zurich (女性二人) と Technical University of Denmark (男性一人) の PhD candidate が自分のポスターで集まって4人で ^{129}I の今度の海洋トレーサとしての応用について熱く議論できた。PAHs についても Utrecht 大学でポスドクを努めている女性研究者が来て東シナ海における PAHs の動態の違いに驚いたそうです。学会全体でも欧米の女性研究者が発揮的で日本の科学が男性に偏っていることを感じた。ポスター発表はコアタイムより一時間も伸びて、来て頂いた人たちのおかげで大成功だった。EGU ではメンターシップ制度があって、参加してみました。おかげで汚染有機物が専門である人たちにであえた。研究的な結論がいうとやっぱり汚染有機物の調査が「モニタリング程度」を超えるべきと改めて思いました。

そして自分が大好きな粒子については海洋中と河川中での動態を様々な地域・シナリオで研究が進めており、自分が勉強不足よりも残っている課題がある程度共通であることを分かった。昔から質的に取り上げてきたプロセス（降水時での浸食、河底の構想変化、一時沈降・再懸濁等）を今でも量的な評価に向けて研究のチャンスがあるとみて少し嬉しかった。しかし、化学だけで頑張るより物理とのコラボレーションが大事であることを改めて理解できた。

今回の EGU 総会はコロナ明けにして久しぶりの現地開催でもあった為参加人数が 15,453 人へのぼったそうです。自分としては初めての対面開催の国際学会で発表件数も盛りたくさんあったことは少し不安だったが最初から最後まで会場に行き水関係で面白い話をいっぱい聞

かせて来た。EGU23 で学んできたことはこれからの研究が進ませる道を決める時に絶対に役立つ。今後も機会があれば EGU と AGU を含めた国際学会に積極的参加し、様々な分野に跨ることが出来る、国際的に活躍できる研究者を目指す。

